

<今回>227回目 2018年2月26(月)16時~18時 601号室

読書は9冊目「邪馬壹国の証明」 p71私の研究方法 より (2月2日は中止とした)

<前回>226回目(18-1-29) 出席者12名

資料(18-01-29-1)前回のまとめ(清水)

-2)大学入試問題日本史B(富川)

## A 報告

遅刻してしまいました。病院で薬をもらうのに4時間かかってしまった。

懇親会8名 津多屋12931円(8・1500) -931円

B 資料 -1)前回のまとめ、大本教の出口王仁三郎が論理体系をまとめて天皇より神様を上位につけたので、不敬罪に問われた。小説邪宗門など参考にしたらどうか。

-2)大学入試日本史Bの出題は微妙である。稻荷山鉄剣の読みを出題し、江田船山の今まで解読できなかった部分を類推させて雄略が東西に権力を伸ばしていたことを類推させるような回答を要求させていた。

C 読書「邪馬壹国の証明」のp63 村岡史学への傾倒 から。

1)「父の国」は村岡史学である。18歳で東北大新入生日本思想史を専攻した。村岡氏の「本居宣長」の本に触れた感激で東北の地を目指した。日本思想史学科なのにギリシャ語やラテン語を勉強せよと言われた。学問の本質はソクラテスやプラトンの学問の方法にあるという。

2)プラトンの言葉「論理の赴くところに行こうではないか、それが何処であろうとも」。本居宣長の「師の説にならずみそ」(先生の説にとらわれることなく)

3)村岡氏の講義は戦闘的であった。気迫は十分に伝わった。受講生2人の学生に対して「古事記序文」の演習の時、「五経正義」の中に「尚書」の失われているのを後漢の孝武帝が記憶力の優れた「伏生」に命じ、学者「晁錯」に記録させてのは「古事記」を天武が命じ「稗田阿礼」が記憶していたのを「太安麻呂」に記録させたのと似ていると指摘したら早速学内発表会をしてくれた。

4)昭和20年の4月から6月までの3か月間の教えだった。勤労働員で授業中止になり別れの宴で、ヒフティの「青年は情熱をもって学問を愛する」という言葉の真実なるを知ったという村岡氏が学生古田に対する印象を的確に述べた餞の言葉であった。身体を愛えという先生たちの中で寸刻を惜しんで勉強せよと言われた。

5)松本清張の「古代史疑」から研究をスタートさせた。「邪馬台国」は原文にはないらしいと気が付いた。親鸞研究は戦後真宗各派に秘蔵されていた新しい史料が続々紹介され、古写本、自筆本の研究が研究水準だった。親鸞研究学会研究水準のレベルは古代史学会より、高かった。「蓮如」の持っていた「歎異抄」にも教団のイデオロギーで手直しされている場所があり、それが又問題であった。

6)紹熙本をはじめ、三國志については時代を越えたすべての版本が「邪馬壹国」であった。これまでの古代史は史料はなくても私はこう思うという論法であった。松下見林以来の観念優先の改定は近代以前の学問である。倭王といえば天皇氏以外はないという史料処理の方法は方法として誤っている。

次回日程 18-3-9(金) 16時から18時 601 会議室

-3-23(金) 15時から18時 601会議室

-4-2(月) 15時から18時 603 号室